

研究論文

変わりゆく学びのかたちに対する現代大学生の適応の諸相
—新しい授業形態への適応と
コロナ禍生活の受容に注目した計量分析—

山本圭三* 樋口友紀**

Various Aspects about Adaptation of University Students to
Changing Forms of Learning

Keizo YAMAMOTO & Yuki HIGUCHI

【要約】

コロナ禍での生活が人々にとって苦しいものであるのは言うまでもないが、その中でも問題なく学習を進められている学生もいれば、学びを十分に進められない学生がいるのも事実である。本稿では、主として学生の生活状況や意識のありように注目し、コロナ禍に対する学生のかような適応形態の違いを探ることを目的とする。具体的には、学生の遠隔授業に対する適応度、およびコロナ禍により大きく変化した学生生活への受容度の2つからなる類型を作成し、各類型の生活態度や意識についての特徴の違いが検討される。

本稿の分析によって、遠隔授業への適応度とコロナ禍生活の受容度からなる類型が一定程度有効であり、各類型はそれぞれ独自の特徴をもつことが示された。ただ、確認された傾向の違いは類型の優劣を示すものではなく、むしろそれぞれがもちうる特性を示すものだと筆者らは考える。昨今の状況下で学生たちが困難を抱え支援を要する事態に至った場合、本稿の分析によって把握された特徴の違いを前提としたうえでのアプローチが試みられる必要のあることを筆者らは主張する。

* 摂南大学経営学部 ** 摂南大学経営学部

1 本稿のねらい

1.1 「オンライン授業」「コロナ禍での生活」への適応の問題

2020年4月以降、度重なる緊急事態宣言の発出により、大学で執り行われる講義は何らかのかたちでオンラインを織り交ぜた形式での実施を避けて通ることができなくなった。学生たちも否応なくこうした状況に巻き込まれたのであるが、2020年度以降も多くの大学において（種々の対応がとられた結果として）授業が成立し教育がなされてきたことを鑑みれば、多くの学生はこの急な環境の変化を受け入れ柔軟に対応していたことが推察される。

だが他方で、授業評価アンケートなどの結果から、学生の中でも「授業のオンライン化に強い拒否感を示す者」や「そもそも今の大学生活に嫌気を感じている者」などが一定程度いることも明確になってきている。こうした事実は、普段授業を受講しているなかでは読み取れないが、内面では不満を燻ぶらせている場合が少なくないこと、その思いは一面的に把握できるものではなくむしろ多面的であることなどを想起させる。仮にそうした事態があるならば、明確に不満を申し出る学生だけでなく、（直接申し出てくることはなくても）このように内面に色々な思いを抱えている学生にも目を向け、必要に応じて何らかの支援策を講じる必要があることは言うまでもない。学生たちの思いもふまえた確な対応をとることがよりよい学修、学生生活の充実に結びつくことは間違いないからである。

本稿では、このように学生が置かれている状況、抱えている思いが多面的であることを念頭においたうえで、「学生の遠隔授業に対する適応度」「コロナ禍により大きく変化した学生生活への受容度」の2視点から学生の分類を試みる。遠隔授業に対する適応のあり方にはどのようなパターンがあり得るかという点を探るとともに、それぞれのパターンがどういった特徴的な傾向を示すのか、パターンの違いはどのような要因によって生まれるのか、といった点についての検討を行う。こうした作業を通じて生活態度や意識を掘り下げて検討し、昨今の状況に対する学生たちの適応のようすを俯瞰的に把握する。その作業によって、支援を必要とする学生たちに対する確なアプローチがおこなえるようにするための土台を提供することが、本稿のねらいである。

1.2 関連する研究の状況

コロナウイルスによる影響が確認され始めた頃、少なくとも日本では教育機関においてオンラインを前提とした授業実施ができる環境が整っていない状態であった。それゆえ多くの人びとが様々な問題状況に直面することになったが、そうした事態を受けて関連する研究も多く取り組まれ、その成果が次々に公表されてきた。その内容が多岐にわたることは言うまでもないが、研究の1つの方向性として、これまで本格的に取り組んだことのなかったオンライン授業をどのように実施するか、その方法と有効性に関して議論する向きがあると思われる（鈴木(2020)、中林(2020)、浅原(2021)、上林(2021)、西川・辻野(2021)、高橋ほか(2021)梅田(2021)、吉村ほか(2021)など)。こうした文脈では、オンライン授業についてあらゆるアイデアが紹介されると共に、その効果が報告されている。新たな取り組みであるオンライン授業について、より効果的、受講者のより良い理解に向けた方法についての議論が主となって

いる。

上記は主として授業を提供する側の観点による議論であるが、他方で授業を受ける学生の側の観点に基づいて、オンラインへの移行や授業受講の実態を把握しようという向きの研究も見られる（早稲田大学大学総合研究センター（2020）、立教大学大学教育開発・支援センター教学IR部会（2020）、許・林（2020）、田村（2021）、内山（2021）など）。そこでは、学生のオンライン環境の程度や授業受講時のようすなどが明らかにされている。また、授業に限らず学生生活全般についての実態調査を実施し、コロナ禍での学生生活の具体的な状況を報告するものも見られる（鈴木ほか（2021）、全国大学生生活協同組合連合会（2021）など）。これらの研究により、さまざまな理由から新しい形態への対応に苦慮する学生が少なくないことが明らかになってきている。

さらに、学生の側に焦点を当てる研究の中にはより踏み込んだ分析をおこなう研究もみられてきている（松河ほか（2021）、江角ほか（2021）、中山（2022））。このうち松河ほか（2021）ではオンライン授業受講に伴う楽しさや疲労に注目し、それらが受講環境や受講状況だけでなく、学生個人々の学習観（環境志向、方略指向、学習量指向という3つそれぞれの高低の組み合わせ）とどう関係しているのかが検討されている。検討の結果、学習は周囲の環境によってのみ決まると考えている者（環境志向のみ群）は、それ以外に比べオンラインでの疲労を感じやすいこと、学習はどのように学習の仕方を工夫するかによって決まるという「方略志向」を合わせ持つ者は疲労を感じにくく楽しさを感じやすい可能性があることなどが明らかにされている。

また江角ほか（2021）では、計量データを用いて新入生の遠隔授業への適応状況とそれをもたらす要因が検討されると共に、学生の授業に対する評価を規定するプロセスが質的データによって検討されている。前者の検討においては遠隔授業への適応をあらゆる指標として授業での学びやすさ、理解しやすさ、授業に対する満足度が用いられ、それらに対して大学からの情報に関するサポートが大きく影響することが確認されている。他方で後者の検討においては遠隔授業受講時の環境が直接的、間接的に授業に対する不満に影響する可能性が指摘されている。

このように「遠隔授業への適応」をターゲットにした検討が進められてきているのに対し、中山（2022）はコロナ禍生活下で感じるストレスと「新しい生活様式」への態度という2つの軸を用いて、コロナ禍生活に対する人びとの適応のようすを検討している。学生データの分析を通して（1）コロナ禍生活でストレスを感じている人びとが皆新しい生活様式に後ろ向きなわけではなく、中にはそれを前向きにとらえている者もいること、（2）2つの軸を組み合わせた3類型は、それぞれが独特の傾向をもつこと、といった点が明らかにされている。

本稿においては「学生の遠隔授業に対する適応度」「コロナ禍により大きく変化した学生生活への受容度」の2視点をもとにした検討をおこなうと先に述べたが、この意味では本稿の観点は中山（2022）がおこなった検討に近い。正確に言えば中山（2022）の議論はコロナ禍における学生の生活のあり方に議論の焦点があるのに対して、本稿ではそうした状況下での学生の学修に焦点を当てている、という点で違いがある。ただし、（新しい生活やリモート中心の学修のような）これまでなかった過ごし方が求められる中、人びとがどのようにそれと折り合いをつ

けつつ日常を生きているのかを探っていく、という点では目的が共通しているといえる。ゆえに本稿では、遠隔授業での適応に関わる知見を前提としつつ、中山（2022）の検討方針を参考に分析を進めることにしたい。

2 用いるデータと変数、および類型の設定

2.1 データと変数

分析には、筆者らが主体となって実施した「若年層の社会生活と諸意識についての調査」によって得られたデータを使用する。同調査は、2020年10月～11月に、関西・山陽・山陰地方が所在地である6つの大学に在籍する学生を対象としてWeb調査の形式で行われたものである。関係者が担当する授業内で回答の協力を依頼するかたちで実施されており、対象者数は931、有効回答数は354、回収率は38.02%である¹。

分析の中心となる「遠隔適応度」と「コロナ禍生活受容度」について、調査では(A)「授業が遠隔で行われることに不満はない」(B)「オンライン授業でも集中できる」(C)「以前の大学生生活に早く戻りたい」といった質問が、それぞれ「当てはまる」～「当てはまらない」の5段階で訊ねられている。以下の分析では、上記のうちAとBを「遠隔適応度」をあらわす項目、Cを「コロナ禍生活受容度」をあらわす項目として用いることにしたい²。

表1 中心変数の基本分布

	(A) 授業が遠隔で行われることに不満はない		(B) オンライン授業でも集中できる		(C) 以前の大学生生活に早く戻りたい	
	度数	有効%	度数	有効%	度数	有効%
当てはまる	102	29.1	63	17.9	88	25.1
やや当てはまる	83	23.7	77	21.9	59	16.9
どちらとも言えない	81	23.1	84	23.9	151	43.1
あまり当てはまらない	56	16.0	89	25.4	25	7.1
当てはまらない	28	8.0	38	10.8	27	7.7
合計	350	100.0	351	100.0	350	100.0

1 回答者の内訳は次の通り。性別：男性164・女性187（不明3）、年齢：20歳未満186・20歳82・21歳56・22歳以上28（不明2）、大学所在地：関西地方127・中国地方226（不明1）。その他調査の詳細に関しては山本・樋口・西岡編（2021）を参照のこと。

なお、調査が実施された2020年10月は、いわゆる新型コロナウイルス感染拡大の第2波（2020年7～8月ごろ）が収まり、第3波（同11月～2021年2月ごろ）に向かう直前の時期にあたる。

2 今回使用する調査データの研究報告書においても、学生の学修における「充実度」を測るものとしてこれらの項目を使用したものもある（佐々木2021）。そこでは、充実度と学修のようすや回答者本人の性格との関連など、本研究の前提となる関係性が大まかに把握されている。本稿で分析をおこなう際には、江角ら（2021）や中山（2022）などと同様にこうした知見をふまえた検討がなされる。

なお、遠隔授業への適応度合いの測定についても議論が見られることから（米沢・中寺2021）、どのような質問項目を用いるのが妥当かという点に関しても議論の余地はある。この点の詳しい検討に関しては、別稿に譲ることにしたい。

表1は、上記の3項目についての基本的な分布を見たものである。本稿で用いているデータの範囲ではあるが、上記の3項目について極端な偏りが見られない点が指摘できる。特に3つ目の元の生活に戻りたいと思うかどうかについては、肯定的な意見がやや多いものの、「どちらとも言えない」が最も多いことや、否定的な意見も一定程度見られるなど、意見が分かれているようすが見てとれる。これを見る限りでも、昨今のコロナ禍における生活を強いられている学生がどのような態度を示すのかについては慎重な判断を要すると推察されよう。

2.2 類型の設定

「遠隔適応度」「コロナ禍生活受容度」という2視点に基づいて分析をおこなうにあたって、本稿では両者が本質的には別の概念であると想定する。単純に考えるなら、遠隔適応度が低い者はコロナ禍生活も受容しない傾向を示すと思われるし、実際データからも両者に経験的な関係は見られている³。だが、次のような可能性を考慮するならば、両者を別のものとみなさなければむしろ事実を見誤る可能性が高いといえるのである。

2020年に入ってから世情を鑑みれば、大学の授業が遠隔のスタイルへ移行することは情勢的にやむを得ないものであったといえる。それゆえ学生の側も、こうした事情を考慮しつつ遠隔授業に慣れていくしかない状況におかれていたと考えられる。だが学生にとってみれば、状況に慣れていくしかないとしても、それが納得いくものと思えるどうかは別のものである。状況的にはやむを得ないとしても、自分の思い描いていた生活、想像していた学生のありかたとは大きく異なる生活を強られることになるため、新たな生活を不本意ながら送ることになった学生は決して少なくないだろう。

本稿の概念で言えば、これは「遠隔適応度」と「コロナ禍生活受容度」の間にズレがある可能性を示唆するものとみなせる。すなわち、遠隔授業に適応している者が皆現状の学生生活を受容しているわけでもなければ、遠隔授業に適応できていない者が現状の生活を嫌がっているとも言い切れない。むしろ2つの意識の間にズレがあることも珍しくないため、そうしたズレを実際に抱えている人びとの特徴も併せて検討しておかなければならないといえる。

以上の点を考慮し、本稿では中心的に取り上げることにした3変数を用いて4つの類型を設定する。類型の作成手順は、次のとおりである。まず、(A)「授業が遠隔で行われることに不満はない」(B)「オンライン授業でも集中できる」について、当てはまるほど数値が高くなるよう値を調整したうえで主成分分析をおこない、主成分得点を算出する⁴。この主成分得点の値をもとに0を基準に全体を2つに分け、0未満を「遠隔不適応」、0以上を「遠隔適応」とする2値の変数を作成する。さらに(C)「以前の大学生活に早く戻りたい」を用いて、「当てはまる」「やや当てはまる」を1つに、それ以外の3つを1つにまとめた2値の変数を作成し、前者

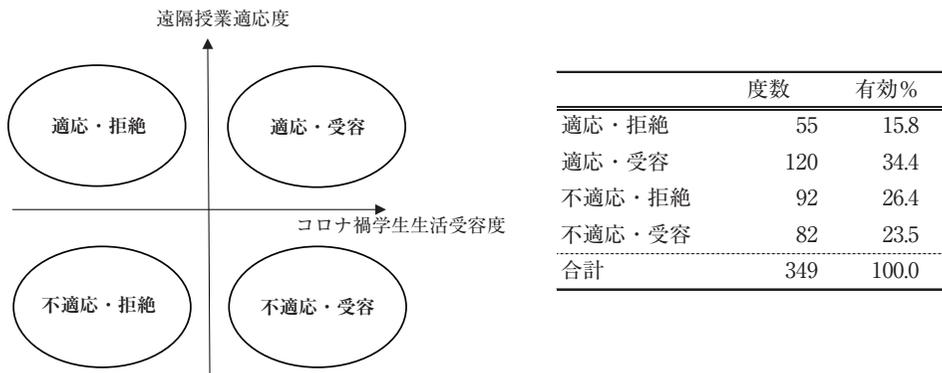
3 実際、データで(A)「授業が遠隔で行われることに不満はない」(B)「オンライン授業でも集中できる」(C)「以前の大学生活に早く戻りたい」の相互の相関関係を確認したところ、AB間が0.409、BC間が-0.313、AC間が-0.415となっていた。

4 主成分分析の具体的な結果は次の通り。抽出される1主成分の固有値は1.409(寄与率70.46%)、因子負荷量は0.839、共通性は0.705である。

を「コロナ禍生活拒絶」、後者を「コロナ禍生活受容」とする。そのうえで、作成された2つの2値変数の組み合わせから類型を設定する。

図1は、上記の手順で作成される類型のイメージと、その度数分布を示したものである。図から、今回用いることにしたデータにおいては「適応・受容」が最も多くなっていることがわかる。だが他方で、先に述べたような意識に何らかのズレを抱えている「適応・拒絶」や「不適応・受容」といった人びとも少なからずいることも確認できる。この結果を見ても、やはりこうした人びとも無視できない程度に存在していると考えの方が妥当だと思われる。

図1 作成される類型



では以下で、作成された4つの類型がそれぞれどのような特徴を持っているのか、について探っていこう。

3 各類型の特徴の確認

類型間の差異を確認していくにあたり、本稿では学生たちの生活のあり方と意識のあり方に注目していきたい。ここでは、生活のようすのうち学業と社会関係についての具体的な様子、意識についてはコロナウイルスに関連する意識と社会のとらえ方、将来に向けた意識をとりあげる。他にも検討すべき内容があり得るが、これらは特にコロナ禍生活に至ったことによる影響が大きいと思われるためである。

3.1 生活スタイルの違い

(1) 日常の過ごし方

まず、学業の具体的なようすから確認しよう。調査では、回答者の授業受講時のようすに関する項目として、「授業にはきちんと参加するようにしている」「課題の提出期限は必ず守る」「グループで取り組む課題が好きだ」「勉強して新たな知識を身に着けるのは楽しい」「大学の成績はいいほうだ」「授業内容を理解できないことがある」「人前で発表することは得意だ」のそれぞれについて、当てはまるかどうかを5段階で訊ねられている。ここでは、それぞれ当ては

まるほど点数が高くなるよう値を調整したスコアを作成したうえで（5点満点）、分析に用いる⁵。

表2 類型ごとにみた授業受講時のようすの違い（平均値の差）

	授業は参加	提出期限 守る	グループ 課題好き	新たな知識 楽しい	大学の成績 良い	授業理解 できない	人前で発表 得意
適応・拒絶	4.655	4.400	3.691	4.418	3.782	3.836	3.111
適応・受容	4.708	4.567	2.908	4.033	3.317	3.508	2.658
不適応・拒絶	4.576	4.370	3.011	4.207	3.348	3.846	2.330
不適応・受容	4.476	4.268	2.683	3.927	3.341	3.585	2.378
主効果p [適応度]	0.024	0.030	0.002	0.107	0.116	0.663	0.001
主効果p [受容度]	0.705	0.789	0.000	0.001	0.039	0.011	0.209
交互作用p	0.310	0.126	0.096	0.578	0.032	0.769	0.088
モデルp	0.106	0.055	0.000	0.005	0.017	0.056	0.003

分析の結果が、表2である。表から、グループ課題を好むこと、知識獲得の楽しみ、成績、人前での発表については類型間で明確な違いが見られている⁶。このうち、「適応・拒絶」の人はグループ課題や人前で発表することに前向きであり、さらに成績がいいという点が顕著だといえる。特に成績については、（交互作用項が有意であることから）他の3つの類型に比べて値が高い点が目立っている。他方、知識獲得についてはコロナ禍生活を「受容」している2つ、人前での発表については遠隔授業に「不適応」である2つの平均値が低い。さらに「不適応・受容」の人は、他に比べグループ課題を好まない傾向が比較的目立っているように見える。

また、モデル自体は有意ではないものの授業への参加や課題提出については適応度の、授業理解については受容度の主効果が効果を示している点も見逃ごせない。関連の様子はわずかではあるが、遠隔授業に適応している者の方がよく授業に参加し課題も期限内に提出する、コロナ禍生活を受容している者の方が授業理解度は高い、という傾向があるように思われる。

次に、学業に対する向き合い方の違いを見てみる。ここでは、「自分は積極的に発言をするほうだ」「気になることはまず自分で調べる」「わからないことがあれば人に聞くことができる」「新しいことに取り組むのが好きだ」という質問に対する回答を用いる⁷。

- 5 これ以降おこなう平均値の差の分析では、多元配置分散分析の結果として2つの独立変数（遠隔適応度：適応／不適応、コロナ禍生活受容度：受容／拒絶）の主効果と交互作用項それぞれの検定結果を示す（表内では「適応度」「受容度」とさらに略記）。「適応度」の主効果が有意であれば遠隔適応度の2者間、「受容度」の主効果が有意であればコロナ禍生活受容度の2者間での差が顕著であることを、交互作用項が有意であれば独立変数間の組み合わせの効果が顕著であることを意味する。
- 6 この分析では、有意水準5%を目安として分析結果を判断することになっている。この後おこなわれる分析でも同様の基準で関連のようすが判断される。
- 7 ここで取り上げる質問は、すべて「当てはまる」から「当てはまらない」までの5段階で訊ねられ

分析の結果が、表3である。表から、ここで取り上げている4項目すべてにおいて類型間の差のあることが分かる。このうち、4項目のいずれも遠隔授業適応度による差が明確であり、「適応」である方が「不適応」よりも値が高い傾向がある。さらに、「分からないことは人に聞くことができる」については、コロナ禍生活受容度による差も明らかであり、特に「不適応・受容」の人びとの値が低い点が目立っている。「気になることはまず自分で調べる」「新しいことに取り組むのが好きだ」についても似たような傾向が見られており、「不適応・受容」の人びとの値は「適応・拒絶」との開きが大きいように見える。

表3 類型ごとにみた学業に対する向き合い方の違い（平均値の差）

	積極的に 発言	自分で調べる	人に聞く	新しいこと 取り組む
適応・拒絶	3.444	4.130	4.370	4.185
適応・受容	2.875	4.150	4.258	3.900
不適応・拒絶	2.652	4.087	4.304	3.641
不適応・受容	2.671	3.780	3.902	3.476
主効果p [適応度]	0.003	0.026	0.010	0.000
主効果p [受容度]	0.099	0.147	0.004	0.081
交互作用p	0.056	0.128	0.118	0.638
モデルp	0.004	0.043	0.002	0.002

(2) 他者関係のようす

先の分析においては、グループ課題や人前での発表、人に聞くことなどについて特に顕著な違いが見られていたが、これらはどれも学修にかかる場において他者の存在が前提となる。その点をふまえるならば、他者との関わり方について違いが大きく見られると想定される。そこで次に、回答者本人が有している他者関係についての違いを確認しよう。

調査では、回答者の他者関係について「いつでも気を遣わずに遊びに誘える友人は多いほうだ」「現在、恋人がいる」「大人数で遊ぶのが好きだ」「知らない人とでもすぐに仲良くなれるほうだ」「人付き合いが煩わしくなる時がある」のそれぞれについて当てはまるかどうかを5段階で、またゼミについて、その集団の一員だと感じるかどうかについて5段階（強く感じる～全く感じない）で訊ねられている。これらの項目に対して、当てはまる・強く感じるほど点数が高くなるよう値を調整しスコア化した変数を作成し、分析に用いる。

分析の結果が、表4である。表から、人付き合いについての煩わしさやゼミに対する帰属感については、類型間の違いが明確にあるとは言えないと分かる。人付き合いに関して煩わしさを感じる人にとっては、そもそも日常の他者関係はつらいものになりやすいと思われる。そう

ている。分析に際しては、いずれの項目も当てはまるほど点数が高くなるようスコア化したものを使用している。

した人びとにとってみれば、ゼミのように一定程度密な関係を持つことを期待される環境もまたつらいものになりがちだとも思われる。しかしながら、こうした点については（ゼミ帰属感において受容度の主効果は見られるものの）明確な違いがあるとまでは言えないようである。

ただしそれ以外の項目は類型間での違いが顕著だといえる。気軽に遊びに誘える友人、恋人の存在、知らない人と仲良くなれることについては、遠隔授業に適応できている方、コロナ禍生活を拒絶している方が平均値は高い傾向がみられる。大人数で遊ぶことを好むかどうかについてはコロナ禍生活受容度のみが差を示しており、「受容」に比べ「拒絶」の2つにおいて値が高いようである。ただ、こうした項目においては「適応・拒絶」の人びとの値は最も高い、「不適応・受容」の値は最も低いという傾向が共通しているとみられる。さらに言えば、特に知らない人と仲良くなれることについて「適応・拒絶」の人びとが有意に高い値を示している点が顕著である。

表4 類型ごとにみた他者関係の違い（平均値の差）

	遊びに 誘える友人 多い	現在 恋人いる	大人数で 遊ぶこと 好き	知らない人 でも仲良く なれる	人付き合い 煩わしい	ゼミ 帰属感
適応・拒絶	3.704	2.907	3.231	3.537	3.556	3.571
適応・受容	3.167	2.017	2.575	2.857	3.504	3.039
不適応・拒絶	2.967	1.944	2.844	2.611	3.800	3.196
不適応・受容	2.793	1.829	2.427	2.549	3.537	3.054
主効果p [適応度]	0.000	0.006	0.101	0.000	0.378	0.328
主効果p [受容度]	0.019	0.010	0.001	0.016	0.230	0.034
交互作用p	0.214	0.036	0.433	0.033	0.441	0.215
モデルp	0.001	0.001	0.004	0.000	0.335	0.091

(3) 「自分の時間」の過ごし方

先の分析で他者との付き合い方、いわば家から離れた外での過ごし方に関して明らかな違いが見られた。では、家の中での過ごし方についてはどうだろうか。「ステイホーム」という言葉に象徴されるように、コロナ禍での生活では以前よりも家の中で過ごす時間が増え、そこでの充実が生活全般の充実を大きく左右するような状況であると目される。その点をふまえ、次に回答者が自由な時間をどう過ごしているのか、具体的には趣味や消費のようすについて検討したい。

調査では、回答者がどのようなものを趣味としているのかを訊ねる項目が設けられている。ここでは、「運動」や「ゲーム」などという具体的な20の項目を挙げ、趣味としているものすべてを選ぶような形式で質問がなされている。このうち、実際に趣味として選択された割合が一

定程度あるものを取りあげ⁸、関連を見たものが、次の表5である。

表からは、遠隔に「適応」する人びとは運動を趣味とする場合が多い、コロナ禍生活を受容している人びとはゲームを、受容していない人びとはショッピングを趣味とする場合が多いなど、遠隔適応度やコロナ禍生活受容度との対応関係も一定程度見られる。ただし、それだけではない類型それぞれの特徴もまた見られている。その様子は、次のように表現できる。適応・拒絶は、運動を趣味として挙げている者が多く、ショッピングを挙げている者もやや多い。そ

表5 類型ごとにみた趣味とするものの違い（クロス表）

		適応・ 拒絶	適応・ 受容	不適応・ 拒絶	不適応・ 受容	合計	N	p
	合計	15.8%	34.4%	26.4%	23.5%	100.0%	349	
運動	○なし	11.7%	31.7%	30.9%	25.7%	100.0%	230	0.002
	○あり	23.5%	39.5%	17.6%	19.3%	100.0%	119	
テレビ	○なし	15.0%	34.2%	25.4%	25.4%	100.0%	193	0.810
	○あり	16.7%	34.6%	27.6%	21.2%	100.0%	156	
レジャー・旅行	○なし	13.8%	34.6%	26.0%	25.7%	100.0%	269	0.146
	○あり	22.5%	33.8%	27.5%	16.3%	100.0%	80	
スポーツ観戦	○なし	15.4%	34.2%	26.0%	24.3%	100.0%	292	0.865
	○あり	17.5%	35.1%	28.1%	19.3%	100.0%	57	
ゲーム	○なし	20.5%	28.0%	31.7%	19.9%	100.0%	161	0.005
	○あり	11.7%	39.9%	21.8%	26.6%	100.0%	188	
インターネット	○なし	16.8%	27.7%	27.7%	27.7%	100.0%	155	0.107
	○あり	14.9%	39.7%	25.3%	20.1%	100.0%	194	
映画音楽絵画等の鑑賞	○なし	12.9%	34.7%	25.2%	27.2%	100.0%	202	0.132
	○あり	19.7%	34.0%	27.9%	18.4%	100.0%	147	
読書	○なし	17.0%	33.0%	25.0%	25.0%	100.0%	264	0.310
	○あり	11.8%	38.8%	30.6%	18.8%	100.0%	85	
SNS	○なし	17.9%	29.1%	23.2%	29.8%	100.0%	151	0.038
	○あり	14.1%	38.4%	28.8%	18.7%	100.0%	198	
料理・食事	○なし	17.7%	32.5%	23.6%	26.2%	100.0%	237	0.075
	○あり	11.6%	38.4%	32.1%	17.9%	100.0%	112	
ショッピング	○なし	13.6%	37.3%	21.4%	27.7%	100.0%	220	0.004
	○あり	19.4%	29.5%	34.9%	16.3%	100.0%	129	
友達と話す	○なし	13.5%	33.5%	20.6%	32.3%	100.0%	155	0.004
	○あり	17.5%	35.1%	30.9%	16.5%	100.0%	194	

8 具体的には、選択された比率が全体の15%以上である12項目を取りあげることにしている。回答比率が低いものを除外するのは、後に示すクロス表の分析において、その結果が正確なものになる（最小期待度数の問題などがクリアになる）ようにするためである。

の一方でゲームを挙げている者が少ない。適応・受容も運動を挙げている者は多いが、ゲームやSNSを挙げている者が多い点が適応・拒絶とは異なっている。不適応・拒絶は運動やゲームを挙げている者が比較的少ない点が目立つ。その分ショッピングを挙げている割合が明らかに高く、友人と話すことについてもやや多い傾向がある。不適応・受容はゲームを挙げる者がやや多いが、それ以上にショッピングや友達と話すことを挙げる者が少ない点が顕著に少ない点が目立つ。さらに運動やSNSも少ないことなどから、こうした人びとは他よりも独特な傾向を示しているようである。

次に、消費について。調査では、回答者が1か月に自由に使えるお金を実額で訊ねると共に、日常的なSNSの利用時間が5段階で訊ねられている⁹。また、「流行に敏感な方だ」「ファッションに気を遣うほうだ」「家の中でも身だしなみに気を遣う」について、当てはまるかどうかを5段階で訊ねられている¹⁰。こうした項目を用いて平均値の差の分析をおこなった結果が、次の表6である。なお表6では併せて、表5で用いていた趣味項目のもとになった20項目（それぞれ2値変数）を用いて、趣味として選択したものの数の合計を算出した「趣味数合計」についての分析結果も示している¹¹。先の表5では具体的な趣味の内容と種類の関連を確認するものであったのに対し、この「趣味数合計」を用いることで回答者が趣味としている範囲の幅広さをあらわすものになる。

表6 類型ごとにみた消費のようすの違い（平均値の差）

	趣味数 合計	自由に 使えるお金	SNS 利用時間	流行に敏感	ファッション 気を遣う	家の中 身だしなみ
適応・拒絶	5.764	37370.4	2.283	3.340	3.868	3.037
適応・受容	5.908	32615.1	2.664	2.675	3.342	2.042
不適応・拒絶	5.761	33911.1	2.609	2.644	3.471	2.163
不適応・受容	4.537	31386.1	2.300	2.506	2.949	2.256
主効果p [適応度]	0.022	0.439	0.530	0.007	0.005	0.053
主効果p [受容度]	0.099	0.205	0.924	0.008	0.000	0.001
交互作用p	0.055	0.693	0.009	0.067	0.988	0.000
モデルp	0.017	0.569	0.061	0.002	0.001	0.000

表からはまず、類型間で趣味数合計に違いのあることが分かる。特に適応度での差が明確で

- 9 具体的には、「1. 1時間未満」「2. 1時間以上3時間未満」「3. 3時間以上5時間未満」「4. 5時間以上8時間未満」「5. 8時間以上」という5段階である。ここでは、1～5までの回答の数値をSNS利用時間の長さをあらわすスコアとして分析に使用することとしている。
- 10 分析に際しては、これら3項目についてそれぞれ当てはまるほど点数が高くなるよう値を調整しスコア化している。
- 11 具体的には、20項目すべてについて趣味としている場合に1、していない場合に0という値を与え、それらの合計を算出している。

あり、遠隔に適応している人の方が趣味数は多い傾向がみられる。また、有意ではないものの受容度についての差や交互作用についても若干効果があるとみられる。具体的な差としては、「不適応・受容」の値が他に比べ低い点に表れていると思われる。「不適応・受容」の人びとは先の分析(表5)において趣味として挙げるものの少なさが目立っていたが、ここでの結果(彼らの趣味の幅は他に比べ狭い)もそれに対応するものだと考えられよう。

SNS利用時間については、適応度や受容度の主効果、およびモデルの検定結果は有意でないものの、交互作用効果は見られている。「適応・受容」と「不適応・拒絶」の2つがよりSNSを利用する、「適応・拒絶」「不適応・受容」はあまり利用しない傾向があるといえそうである。

流行への敏感さと家の中での身だしなみについては、主効果ないし交互作用効果が有意である。いずれも「適応・拒絶」の人びとが他に比べ高い値を示す傾向のあることを示しているように見える。ファッションに気を遣うことについても似たような結果となっているが、これについては「適応・拒絶」に比べて「不適応・受容」の値が顕著に低いことも目立っているといえる。

3.2 心理的・意識的側面の違い

ここまでの分析からは、特に「適応・拒絶」と「不適応・受容」の2つの特徴がよく示されたように思われる。「適応・拒絶」の人びとが学修や人付き合いに積極的で、趣味・消費についても活発である一方、「不適応・受容」の人びとはいずれにおいても消極的であるという顕著な違いがあるといえそうである。これらの2類型は、先に述べた通り(一般的な認識からすると)適応度と受容度の間にズレを抱えている存在だと想定される。こうした人びとにおいてかように顕著な違いが見られていることは、注目に値しよう。

では、そのような違いを念頭に置きつつ、次に回答者の有する意識に注目した検討をおこないたい。ここでは特に、コロナウイルスに関連する意識と社会のとらえ方、将来に向けた意識をとりあげる。学生たちを含め、人びとはコロナ禍によって社会の見通しが立ちにくい中生きていかざるを得ない状況におかれた。それゆえ、コロナウイルスやそれに対応する人びとに対してどのような態度を示しているのか、コロナ禍をふまえ社会をどのように見ているのか、コロナ禍を経た自分の将来をどのように見ているのか、という点にはやはり特徴がよくあらわれるのではないかと考えられるためである。

(1) コロナウイルスに関連する意識

調査では、コロナウイルスに関連する意識として「自分がコロナウイルスに感染することはそうそうないと思う」「コロナウイルスに感染することは怖くない」「自分から周りの人に感染するのは嫌だ」「不用意に他人に近づく人は不快だ」「自粛が要請されていなくても、外出は控えたほうが良いと思う」「コロナ禍による『新しい生活様式』がわりと気に入っている」というそれぞれについて、当てはまるかどうかを5段階で訊ねられている。これらについて、当てはまるほど点数が高くなるよう値を調整しスコア化したうえで平均の差の分析をおこなった結果が、次の表7である。

表からは、コロナ感染可能性の認知、外出自粛、新しい生活様式に対する好感度について明確な差があることが分かる。このうちコロナ感染可能性の認知については、適応度の主効果が有意であり適応の2つが高い値を示す傾向があると見えるが、中でも「適応・拒絶」の人びとの値が特に高い。また有意ではないが、コロナ感染を恐れることについても同様に「適応・拒絶」の人びとのみが高い値を示す傾向が若干あると見える。すなわち、「適応・拒絶」の人びとは他の人びとに比べ自分がコロナに感染することはそうそうないと感じており、コロナに感染することを（わずかにではあるが）恐れない傾向があるとみられる。

表7 類型ごとにみたコロナ関連意識の違い（平均値の差）

	コロナ感染 そうそう ない	コロナ感染 怖くない	自分から 周囲への 感染が嫌	不用意に 近づく人 が不快	外出は 控えた ほうが良い	新しい 生活様式 好き
適応・拒絶	3.500	2.537	4.519	3.407	3.722	3.389
適応・受容	2.950	2.084	4.471	3.160	3.521	3.605
不適応・拒絶	2.778	1.989	4.544	2.989	3.211	2.389
不適応・受容	2.866	2.049	4.512	3.366	3.556	3.232
主効果p [適応度]	0.011	0.068	0.747	0.719	0.118	0.000
主効果p [受容度]	0.131	0.191	0.721	0.537	0.463	0.000
交互作用p	0.021	0.061	0.944	0.028	0.027	0.014
モデルp	0.006	0.053	0.960	0.139	0.037	0.000

外出自粛については、有意な交互作用効果が確認できる。平均値の差としては「不適応・拒絶」の人びとの値が他に比べ低く、特に「適応・拒絶」との差は顕著なものになっているといえる。新しい生活様式を好むことについてもやや似たような傾向が見られており、「不適応・拒絶」の人びとが他に比べ値が顕著に低い。一方で、「適応・受容」の人びとが新しい生活様式を最も好む傾向も明確になっている。また、モデル自体の結果は有意ではないが、不用意に近づく人を不快に思うことについて交互作用が見られる点も注目すべきだと思われる。「適応・拒絶」や「不適応・受容」といった人びとがこうした意向をより強く持っている傾向があり、特に「不適応・拒絶」との値の差は顕著になっているためである。

(2) 社会のとらえ方

次に、回答者が社会をどのように見ているのか、という社会のとらえ方について検討したい。調査では、これらに関する質問として家族や友人、世の中の人々、警察やマスメディアなど具体的な12の事柄に対する信頼度を5段階で訊ねるものが設けられている¹²。これらについて、信

12 12の項目は、具体的に家族、友人、恋人、教員、世の中の人々、自分自身、行政、警察、日本、マスメディア、タレント、SNSである。5段階の選択肢は具体的に、信頼している、やや信頼している、どちらとも言えない、あまり信頼していない、信頼していないである。

頼しているほど値が高くなるよう数値をすべて調整したうえで、12項目を合算した最大60点のスコアを作成する。総合的な信頼度をあらわすとみなせるこのスコアを、回答者の社会のとらえ方の1つの指標として分析に使用する。

また、調査では信頼以外にも「今の日本は、競争が激しい社会だ」「社会のことを考えるよりも、まず自分の生活をどうよくするかを考えるべきだ」「豊かな人からの税金を増やしても、政府は恵まれない人への福祉を充実させるべきだ」「自分と関わりのない人が不幸になっても、大して気にならない」「些細な迷惑行為も、見逃してはならない」について当てはまるかどうか、現状の日本の政治に対してどれくらい満足しているかがそれぞれ5段階で訊ねられている。これらについても、当てはまる・満足しているほど点数が高くなるよう値を調整したうえで分析に使用する。

分析の結果が、表8である。自分の生活を優先させる意識、他人の不幸に対する認識については明確な差が見られないものの、それ以外の項目については類型間での差が明らかなようである。具体的な違いのようすは、次の通りである。

信頼に関しては適応度、受容度での差も明らかなようであるが、それ以上に交互作用効果が目立っている。不適応の2つは差がそれほどないのに対し、適応の2つは差が顕著であり、「適応・拒絶」は最も値が高く、「適応・受容」は最も値が低くなっている。「適応・拒絶」の人びとは周りを信頼する傾向がある一方、「適応・受容」の人びとは他の誰よりも周りを信頼していないようである。

表8 類型ごとにみた社会のとらえ方の違い（平均値の差）

	信頼 合計値	競争 激しい社会	社会より 自分の生活	福祉を充実 すべき	他人の不幸 気になら ない	迷惑行為 見逃さない	日本政治 への満足度
適応・拒絶	43.098	4.148	4.019	3.830	3.148	3.593	3.167
適応・受容	36.938	3.712	3.958	3.345	3.185	3.227	2.725
不適応・拒絶	37.301	3.901	3.934	3.440	2.945	3.110	2.736
不適応・受容	37.450	3.500	3.780	3.451	2.976	3.488	2.756
主効果p [適応度]	0.013	0.035	0.201	0.413	0.120	0.697	0.128
主効果p [受容度]	0.001	0.000	0.317	0.070	0.804	0.771	0.066
交互作用p	0.000	0.872	0.674	0.038	0.982	0.002	0.029
モデルp	0.000	0.001	0.500	0.052	0.426	0.016	0.024

日本社会での競争についての認知もまた適応度、受容度での差が明らかであるが、こちらは交互作用は見られない。不適応より適応の方が、受容より拒絶の方が高い値を示す傾向があり、そのため「適応・拒絶」が最も高い値、「不適応・受容」が最も低い値を示している。すなわち、「適応・拒絶」の人びとが最も日本社会での競争の激しさを感じているようである。

福祉の充実に対する意見については主効果やモデル自体の検定結果が有意ではないが、交互作用項が有意である点は無視できない。福祉を充実させることに対しては、「適応・拒絶」がより肯定的な意見を示す傾向があるとみられるためである。この傾向は政治に対する満足度でよ

り顕著になっており、「適応・拒絶」のみが高い値を示すことが、有意な交互作用効果としてあらわれている（主効果は非有意）。

些細な迷惑行為でも見逃さないかどうかは、いわば回答者の寛容さを測るものだと考えられるが、こちらについても主効果は有意でないが交互作用は有意になっている（モデル自体の検定結果も有意）。具体的には「適応・拒絶」および「不適応・受容」の人びとが非寛容な傾向、「適応・受容」および「不適応・拒絶」の人びとは寛容な傾向を示しているように思われる。

(3) 将来に向けた意識

学生にとって、近い将来として問題になるのは就職後の生活だろう。こうした就業や就職後についての意識として、調査では「将来、自分で起業したい」「将来の生活について不安がある」「卒業後、自分はパートやアルバイトとして働いてもよい」「大企業に就職したい」というそれぞれについて、当てはまるかどうかを5段階で訊ねられている。これらについて、当てはまるほど点数が高くなるようスコア化（5点満点）したうえで、平均値の差の分析をおこなった結果が次の表9である。

表9 類型ごとにみた将来に向けた意識の違い（平均値の差）

	起業したい	将来の生活に不安	卒業後パート アルバイト	大企業に 就職したい
適応・拒絶	2.870	4.037	2.463	2.963
適応・受容	2.458	3.950	1.992	3.117
不適応・拒絶	2.300	4.341	1.835	2.944
不適応・受容	2.134	4.012	2.268	3.244
主効果【適応度】	0.004	0.165	0.468	0.638
主効果【受容度】	0.059	0.066	0.915	0.113
交互作用	0.407	0.307	0.001	0.618
モデル	0.013	0.052	0.007	0.426

表から、起業についての意欲や卒業後パート・アルバイトとして働くことの許容については類型間で明確な差があると分かる。このうち起業についての意欲は適応度による差が顕著なようであり、「適応」の2つは「不適応」の2つよりも平均値は高いとみられる。ただし受容度に関しても（有意ではないが）若干差が見られ、そのため「適応・拒絶」が最も高い値、「不適応・受容」が最も低い値を示し、それらの差は大きいように思われる。

卒業後パート・アルバイトとして働くことの許容については、適応度、受容度のどちらも主効果は有意ではないが、交互作用が有意な効果を示しているようである。具体的には「適応・拒絶」および「不適応・受容」が高い値を示している傾向があるとみられる。すなわち「適応・拒絶」および「不適応・受容」の人びとはパート・アルバイトとして働くことを許容している、逆に言えば「適応・受容」および「不適応・拒絶」の人びとは正社員として働きたいと考えていると推察される。

他方で、将来の生活に対する不安や大企業への就職意欲については有意な差が見られていない。特に、不安に関して顕著な差が見られない点は注目に値すると思われる。遠隔授業への適応やコロナ下での学生生活に対する向き合い方がどうであったとしても、それが将来の見通しをも左右するものにはなっていない様子が見えるからである。

3.3 各類型のプロフィール

以上の分析によって、類型それぞれが独自の特徴を示すことが見えてきた。ここで各類型がどのような特徴を示すものかをまとめ、類型ごとにプロフィールを描いてみたい。

「適応・拒絶」の人びとは、他の類型の人びとに比べ（理解度は高くないものの）学修に積極的であり、友人が多かったり知らない人と仲良くなったりできるなど他者関係にも前向きな姿勢を示している。趣味としても体を動かすことを好んでおり、ファッションや身だしなみ、流行にも積極的である一方、SNSはあまり使わないことから、リアルな人付き合いを好んでいる傾向があると思われる。意識面ではコロナ感染をさほど恐れていないようだが、他方で外出は自粛すべきと考えている。信頼度は誰よりも高く政治にも満足しているようだが、その一方で社会における競争の激しさも認知しており、そのため些細な迷惑行為に対しても寛容でない意向を示している。将来起業することも視野に入れている一方でパート・アルバイトとして働くことも許容している。こうした傾向から、「適応・拒絶」の人びとは気立てもよく、コミュニケーションが上手な人物像が思い描かれる。そのような彼らだからこそ遠隔授業には他者の力も借りつつ適応できるが、人と直接会うことのできないコロナ禍での生活を拒み、従来の生活に戻りたいと考えているのではないかと考えられる。

「適応・受容」の人びとは成績や学修態度については平均的だが、人付き合いについては大人数で遊ぶことや知らない人と仲良くなることはあまり得意にしていないようである。他方で趣味の数は誰よりも多くSNSなども積極的に利用しているが、ファッションなどに対する興味は平均的であり、特に家の中での身だしなみはあまり気にしていない。意識については、コロナに対する恐れは平均的であるものの、「新しい生活様式が気に入っている」と考える者が目立っている。他方で種々の物事に対する信頼感や政治への満足感は高くないが、他者に対する寛容さは高いようである。起業する意欲は平均的であるが、パート・アルバイトとして働くよりも正社員として働きたいと考えているようである。こうした傾向を総じてみると、「適応・受容」の人びとは簡単に物事を信用しない、自分に必要なこと以外には労力を割かないといった、ある種合理的な判断基準で行動している姿が想起される。彼らはそのような基準で判断するため、コロナ禍での生活も「現状では、受け入れるしかない」と考えているのではないと思われる。

「不適応・拒絶」の人びとは学修態度や成績は平均的だが理解度がやや低く、人前での発表や積極的に発言することなどを苦手としている。新しいことに取り組むことについてもあまり得意とは言えないようだが、分からないことを人に聞くことにさほど抵抗はなさそうである。他者とのつきあいについてはおおむね平均的であるが、気軽に遊べる友人はあまり多くなく、知らない人と仲良くなることは苦手としている。趣味についてはどちらかと言えば積極的な方であり、運動やゲームよりもショッピングを好んでいるが、ただし流行やファッションなどにつ

いての関心が高いわけではない。SNSをよく利用し、友人と話すこともよくしている傾向があることから、身近な友人との付き合いを重視している。意識については、「新しい生活様式」を誰よりも気に入っていない、迷惑行為に対して寛容である、正社員として働きたいと考えている、といった特徴を示している。彼らはおおむね平均的な傾向を示しており、なおかつ新たな生活に対しても否定的な態度を示すことから、「不適応・拒絶」の人びとのようなすは大学生活に関する従来のな価値基準を内面化している、これまでの平均的な大学生に近いと考えられる。

「不適応・受容」の人びとは、学修に対して最も消極的であり、他者関係も得意としてない。趣味についてもゲームをやる割合がやや高いもののそれ以外は全般的に消極的である。特にショッピングや友人と話すことは極端に少なく、同様にファッションや流行に対しても興味を示さないなど、「不適応・受容」の人びとはその消極性が目立つ存在である。意識については社会での競争についてあまり認知していない、どちらかという迷惑行為には非寛容、政治に満足しているわけではない、といった傾向はある。ただしそれ以外はおおむね平均的な傾向を示していることから、こうした人びとはコミュニケーションや生活に対して貪欲さに欠けるという点が大きな特徴だといえる。オンラインに適応できていないにもかかわらず生活を受容しているのは、こうした人びとがそもそも生活に積極的でなく、現状に対して明確な意向を示さないからなのかもしれないとも思われる。

4 類型間の違いをもたらす要因の検討

本稿で設定した類型それぞれがどういった特徴を示すのかについては、ある程度明らかになったといえる。では次に、こうした類型の違いがどういった要因によってもたらされるのか、という点を確認したい。類型の違いを生じさせる要因は色々考えられるが、ここではごく基本的な要因として回答者の社会的背景に関わる変数と、根本的な性格に関わる変数をとりあげて検討したい。

4.1 社会的背景要因の影響

社会的背景として、ここでは回答者の属性と家庭のありようという2つの側面に注目する。このうち属性に関して、調査では回答者の性別、所属大学、出身地の都市度合い（大都市、地方都市、農村部のどれか1つを選択）を訊ねる質問が設けられている。これらの項目と類型との関連を確認したものが、次の表10である。なおここでは、所属大学の回答を用いて、所在地が関西地域であるか中国地域であるか、という2値の変数を作成したものを分析に用いている。調査では回答者の具体的な居住地は訊ねられていないが、この大学所在地が回答者の居住地に関する内容に対応するものと考えてよいと思われる。

表から、性別と類型の間に関連が見られることが分かる。具体的には、男性においては「適応・受容」がやや多くみられるのに対し、女性においては「不適応・拒絶」がやや多い傾向がある。他方、大学所在地や出身地都市度合と類型の間に関連があるとは言えない。新型コロナウイルスの感染拡大状況の地域差を鑑みればこうした変数とも関連があるように予想されるが、今回のデータで見る限りでは明確に関連しているわけではないと判断される。

表10 類型と社会的背景との関連（クロス表）

		適応拒絶	適応受容	不適応拒絶	不適応受容	合計	N	p
性別	男性	16.7%	40.7%	19.8%	22.8%	100.0%	162	0.026
	女性	14.6%	28.6%	32.4%	24.3%	100.0%	185	
	合計	15.6%	34.3%	26.5%	23.6%	100.0%	347	
大学所在地	関西	16.5%	29.1%	29.9%	24.4%	100.0%	127	0.439
	中国	15.3%	37.4%	24.3%	23.0%	100.0%	222	
	合計	15.8%	34.4%	26.4%	23.5%	100.0%	349	
出身地都市度合	大都市	24.5%	20.8%	26.4%	28.3%	100.0%	53	0.154
	地方都市	14.6%	35.7%	28.6%	21.1%	100.0%	213	
	農村部	13.4%	39.0%	20.7%	26.8%	100.0%	82	
	合計	15.8%	34.2%	26.4%	23.6%	100.0%	348	

次に、回答者の家庭のようすについて確認する。調査では「出身家庭は豊かな方である」「家族とは仲が良い」「家に一人になれる部屋がある」「高齢（65歳以上）の家族と一緒に暮らしている」のそれぞれについて、当てはまるかどうかを5段階で訊ねる質問が設けられている。こうした質問の回答について、すべて当てはまるほど点数が高くなるよう値を調整した5点満点のスコアを作成し、類型ごとのスコアの平均値の差を見たものが次の表11である。

表11 類型と家庭のようすとの関連（平均値の差）

	出身家庭豊か	家族と仲良し	家に一人になれる部屋	高齢家族と一緒に暮らす
適応・拒絶	3.764	4.491	4.455	2.255
適応・受容	3.508	4.283	4.513	2.392
不適応・拒絶	3.587	4.380	4.489	1.826
不適応・受容	3.329	4.111	4.232	1.927
主効果p [適応度]	0.137	0.143	0.220	0.012
主効果p [受容度]	0.035	0.018	0.370	0.513
交互作用p	0.992	0.761	0.204	0.920
モデルp	0.135	0.084	0.315	0.048

表から、高齢家族と一緒に暮らすことについては適応度による違いが明確であり、高齢家族と暮らしている者の方が「適応」になる傾向があるといえそうである。また、モデル自体の検定結果は有意ではないが、家族との仲の良さは受容度との関連が若干あるとみられる。具体的には「受容」よりも「拒絶」の方が値は高い傾向、すなわち家族の仲がいい者の方がコロナ禍生活を嫌がる傾向があるとみられる¹³。しかしながら、それらの関連は顕著なものというほどで

13 高齢家族との同居が関連を示すのは、自分が高齢家族と同居している者はそうでない者よりもウイ

はないうえに、他の2変数については類型間で平均値の差があるとは言えない。それゆえ、家庭のようすについても顕著な関連があるとは判断しづらいただろう。

4.2 基本的な性格との関わり

次に、回答者の基本的な性格について検討してみる。回答者がどのような性格を有しているのかによっても、遠隔授業に適応できるかどうかやコロナ禍での学生生活が受け入れられるかどうかは変わってくると考えられるためである。

調査では、回答者の基本的な性格について、当てはまるものをすべて選択してもらう多項選択形式によって訊ねた項目がある。ここでは、特に類型との関連が想定される「自信がある」「面倒くさがり」「人目を気にする」「心配性」「思いやりが強い」「几帳面」「占いを信じる」といったものをとりあげ、関連のようすを確認する。

表12 類型と基本的性格の関連（クロス表）

		適応・ 拒絶	適応・ 受容	不適応・ 拒絶	不適応・ 受容	合計	N	p
	合計	15.8%	34.4%	26.4%	23.5%	100.0%	349	
自信がある	○なし	11.4%	36.7%	27.3%	24.6%	100.0%	264	0.001
	○あり	29.4%	27.1%	23.5%	20.0%	100.0%	85	
面倒くさがり	○なし	26.4%	27.5%	26.4%	19.8%	100.0%	91	0.011
	○あり	12.0%	36.8%	26.4%	24.8%	100.0%	258	
人目を気にする	○なし	20.4%	34.7%	21.4%	23.5%	100.0%	98	0.372
	○あり	13.9%	34.3%	28.3%	23.5%	100.0%	251	
心配性	○なし	18.3%	28.7%	24.3%	28.7%	100.0%	115	0.209
	○あり	14.5%	37.2%	27.4%	20.9%	100.0%	234	
思いやりが強い	○なし	12.0%	32.3%	23.4%	32.3%	100.0%	167	0.002
	○あり	19.2%	36.3%	29.1%	15.4%	100.0%	182	
几帳面	○なし	15.7%	34.3%	28.0%	22.0%	100.0%	254	0.629
	○あり	15.8%	34.7%	22.1%	27.4%	100.0%	95	
占いを信じる	○なし	15.1%	34.7%	24.8%	25.4%	100.0%	311	0.045
	○あり	21.1%	31.6%	39.5%	7.9%	100.0%	38	

分析の結果が、表12である。類型との関連が見られているものについて、その傾向をまとめれば次のように表現できる。

遠隔授業に適応している者のうち「適応・拒絶」は、自信があると回答する者が明らかに多

ルスを家に持ち込むことを避けたいと考えるため、遠隔授業を許容しやすいのだろうと考えられる。また家族との仲の良さや受容度との関連については、家族と仲が良いゆえに家族ともこれまでと同じような生活（家でも気兼ねなく過ごせる、家族と出かけるなど）を送りたいと考えるため、以前の生活を好むのではないかと推察される。

く、思いやりが強いことや占いを信じる者も多い傾向がある一方、面倒くさがりだと回答する割合は少ない。これに対し「適応・受容」は逆に自信があると回答する割合が少なく、占いについても割合はやや少ない一方、面倒くさがりや思いやりについては回答割合が若干高くなる傾向がみられる。

遠隔授業に適応していない者のうち「不適応・拒絶」は自信があるという回答がやや少なく思いやりが強いという回答がやや多い傾向があるが、ただそれ以上に占いを信じるという回答の高くなっている点が目立っている。一方「不適応・受容」は思いやりが強いことや占いを信じることについての回答割合が明らかに低い傾向が見られ、自信があることについてもやや割合が低くなっている。

ただ、上記の関連のようすを見る限り、顕著な関連を示すものはそれほど多くないことも事実のようである。また人目を気にすること、心配性であること、几帳面であることについては関連があるとは言えない。少なくともこうした性格であることによって、いずれかの類型になりやすいといったことはあまりないとみられる。

先の表10および表11の結果も合わせて考えてみても、取り上げた変数のうち本稿で作成した類型の違いを明確に左右する要因と考えられるものはあまりないと見るのが妥当だと思われる。このため、類型の違いが何によって生み出されるのかという点についてはさらに別の変数を用いた検討が必要だといえる。

5 結果のまとめと今後に向けた視点

本稿の分析を通して明らかになった重要な点をまとめれば、次のようになる。

(1) 遠隔授業に適応できていることとコロナ禍での学生生活を受け入れることは、(経験的には一定程度の関連を示すものの) 必ずしも一致するとは限らず、2つの間にズレがあるパターンも少なくない。

(2) 遠隔授業への適応度とコロナ禍生活の受容度から作成される類型については、それぞれが独自の特徴を示す。

(3) 類型の違いをもたらし要因については、性別や高齢者同居、自信や面倒くさがりであることといった性格などが一定程度の効果を示す。ただし類型の違いを左右する決定的な要因は他にあると考えられる。

以上のうち、特に2の点をふまえれば、本稿で目的としていたことは一定程度達成できたのではないかと判断される。ただ一方で、今回の類型についてはそれぞれの優劣を単純に判断するものではないし、そうした判断は難しいという点には注意が必要である。というのも、先の分析では各類型の違いがあらゆる側面にわたって見られることが明らかにされていた。それゆえ、ある類型の特定の点を問題として取り上げたとしても、他の側面ではむしろ望ましいと思われる傾向をもつ、といった場合もあり得るためである。また、類型の優劣を判断するためには一定の「望ましい姿」を前提としなければならないが、どういった姿を望ましいと考えるかについてもまた議論があり得る。その意味でも、今回の類型について優劣を単純に判断することは難しいといえる。

それゆえ冒頭に述べていた通り、今回明らかになった種類の違いは、今後学生たちに何らかの支援の手を差し伸べる必要が生じた際に、その方法や有効性を考慮する際の材料として有効になるものだと筆者らは考えている。少なくとも筆者らとしては、学生の問題状況に対して対応が必要になった際に一面的な判断で臨むのではなく、本稿で示されたような種類の違い、すなわち学生の態度や意向のパターンをふまえた上でもっとも的確だと考えられるアプローチが講じられることを期待したい。

【付記】

本稿で用いているデータの収集にあたっては、摂南大学人を対象とする研究倫理審査委員会の審査を受けた(2020-035)。また、研究協力者や調査にご協力いただいた多くの学生の皆さまにこの場を借りて感謝申し上げます。

【文献】

- 浅原知恵, 2021「学生アンケートの回答と成績との関係から推察される『適性処遇交互作用』オンデマンド型オンライン授業をふりかえって」『城西大学教職課程センター紀要』5:5-12.
- 江角周子・白岩伸也・小楠美貴・坂本雄士, 2021「大学新生における遠隔授業への適応とその要因——新型コロナウイルス感染症拡大下における学生への支援のあり方に焦点をあてて」『浜松学院大学研究論集』17, 37-55.
- 上林憲行, 2021「コロナ禍における緊急避難的代替措置としての全学オンライン授業支援の戦略と戦術: その記録、レビュー、インパクトについて」『Musashino University Smart Intelligence Center 紀要』2:4-21.
- 松河秀哉・山内保典・佐藤智子・中川学・縣拓充・中村教博・串本剛・杉本和弘・渡邊文枝, 2021「オンライン授業の現状と学生の評価——基礎ゼミ受講者へのアンケート結果を中心に」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』7:3-21.
- 中林幸子, 2020「資料配布型オンライン授業の取り組み」『教職研究』2020:129-42.
- 中山ちなみ, 2022「コロナ禍状況における大学生のストレスと「新しい生活様式」への態度——2020年Web調査データを用いた計量分析」『ノートルダム清心女子大学紀要 文化学編』46(1).
- 西川麦子・辻野理花, 2021「コロナ禍のオンライン授業をメディア実践する——伝え学び合う場をつなぐ」『甲南大学紀要. 文学編』171:131-55.
- 立教大学大学教育開発・支援センター教学IR部会, 2020「オンライン授業についてのアンケート 実施結果概要」(<https://www.rikkyo.ac.jp/about/activities/fd/qo9edr0000005dbratt/>, 2021年11月30日閲覧).
- 佐々木優斗, 2021「遠隔授業への適応度」山本圭三・樋口友紀・西岡暁廣編, 2021『2020年度「市場調査実習」成果報告書——「大学生の社会生活と職業意識」調査』摂南大学経営学

部, 109-16.

鈴木明・平工志穂・藤島遥香・田村達也, 2021「オンライン授業時における大学新入生の生活習慣、活動量に関する調査研究」『東京女子大学紀要論集』71(2):105-18.

鈴木智子, 2020「双方向型実習系オンライン授業の取り組み」『ライフデザイン学研究』16:155-69.

高橋哲也・大曾基宣・真崎憲二・片岡玲実奈, 2021「オンライン授業に対する大学生の理解度とストレス度について」『名古屋女子大学紀要 家政・自然編、人文・社会編』67:247-55.

田村岳充, 2021「受講者アンケートから見るオンライン授業の効果と課題——2020年度前期開講、英語科教育法Ⅱの授業を通して」『宇都宮大学共同教育学部研究紀要』71:331-45.

内山仁志・西村健一・高橋泰道, 2021「インターネット環境についての実態調査とオンライン授業に関するアンケート調査」『人間と文化』4, 184-94.

梅田礼子, 2021「オンライン授業実践報告とポスト・コロナの教育改革についての考察」『和歌山大学クロスカル教育機構研究紀要』2:152-73.

早稲田大学大学総合研究センター, 2020「オンライン授業に関する調査結果」(<https://www.waseda.jp/top/news/70555>, 2021年11月30日閲覧).

許挺傑・林満理子, 2020「オンライン授業に対する学生評価アンケートについての一考察——テキストマイニングの手法を用いて」『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』58:157-78.

山本圭三・樋口友紀・西岡暁廣編, 2021『2020年度「市場調査実習」成果報告書——「大学生の社会生活と職業意識」調査——』摂南大学経営学部.

米沢崇・中寺麻友, 2021「オンライン形式・双方向型授業での大学生のソーシャルスキルと授業適応感の関連」『日本教育工学会論文誌』45:1-4.

吉村日出東・石橋裕子・神谷純子・平田敦義・江田慧子, 2021「コロナ禍の大学におけるオンライン授業の実践報告」『帝京科学大学教育・教職研究』6(2):87-95.

全国大学生生活協同組合連合会, 2021「届けよう！コロナ禍の大学生活アンケート 集計結果報告」(<https://www.univcoop.or.jp/covid19/>, 2021年11月30日閲覧).